

# 物語における「三回化」の諸相

## Various Aspects of *Trebling* in Narratives

小田淳一  
Jun'ichi ODA

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

*Trebling* means that a certain element of a narrative structure is repeated three times. This element is not only part of the attributes of characters appearing in a narrative structure, but also an individual or collective function of Propp's structural function model. The aim of this paper is to analyze various aspects of *trebling* in narrative texts that we collected in fieldwork from islands in the Western Indian Ocean (Madagascar, Réunion, Seychelles, Comoros and Zanzibar) and in the *One Thousand and One Nights* which had a great influence on narratives of these islands, to show how the phenomenon of *trebling* in particular cases creates a multi-structured and self-similar narrative text.

### 1. はじめに

物語における「三回化 *Trebling*」とは、何らかの物語要素(多くの場合は或る「行為」であり、更には、或る属性を有する状態も含む)が三回繰り返されることを意味する。プロップの物語機能論[Propp 1970 (1969)]で述べられている三回化において、繰り返される要素は次のようなものである。

- 属詞的性質を持つ個別的な細部(龍の3つの頭など)
- 或るひとつの機能
- 機能の対(「追跡-救出」など)
- 機能のグループ、或いはシーケンス全体(「贈与者」が「主人公」に「呪具を贈与」など)

また、反復の様態によって次のような分類が可能となる。

- 等価的(「3つの任務」「3年の務め」など)
- 反復の度に程度が増大する(任務の難度、闘いの激しさなどが三回目にmaxに達するなど)
- 最初の2回が否定的結果で、三回目が肯定的結果

更に、行為が単に機械的に反復される場合や、筋の展開を中断して反復を起こさせる要素が導入される場合がある。

### 2. 「三回化」の例

本節では、前節で述べたプロップの区分による三回化に類した例を幾つか挙げるが、「属詞的性質を持つ個別的な細部」については事例が多すぎるので省略する。また、例を挙げるに際しては、後述する分析の対象である『千一夜物語』との関連を考慮して、その影響を明らかに受けているインド洋西域島嶼群の民話のうち、筆者が現地にて採話・収集したテキストの中から選択する。尚、プロップの「機能」は概ね、トマシェフスキーが示した「束縛された」かつ「動的」なモチーフと等価であるが、本論考ではそのような「機能」以外の行為も三回化を構成する要素として取り扱うこととする。

以下に挙げる例の出典として付した略号は、それぞれ次の通りであり、セーシェル民話以外の略号に続く識別子は採話時の

連絡先: 小田淳一, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1, Tel: 042-330-5695, Fax: 042-330-5610, odaj@aa.tufs.ac.jp

音源のトラック番号である。

kom: コモロ民話[小田 2013]<sup>1</sup>

zan: ザンジバルのスワヒリ民話[小田 2013]

sey: セーシェル民話[小田 2014a]<sup>2</sup>

#### 2.1 ひとつの機能、或いは行為の継起的反復

- 大食いのジン(魔人)が牛の脚を3本食べる[kom: 2\_3].
- 3本のバナナと敵の髪を食べて殉死する[kom: 36\_2].
- 子供の宿命を3人の天人が記す[zan: 116].
- 水浴び中に衣服を取られた娘がそれを返すよう三回頼む[sey: p. 203].
- 裁判官が容疑者の岩に、罪状認否を行うよう三回繰り返して命じる[sey: p. 241].

#### 2.2 機能(或いは行為)の対/グループ/シーケンス

- 鳥が主人公に友人の命の危機を三回知らせ、その度に回避させる<sup>3</sup>[kom: 30].
- 3匹の動物の係争を仲裁して呪具を3つもらう[sey: p. 127].
- 父親の金を三回盗んで呪具を3つ買う[sey: p. 137].
- 海の女王を殺さない代わりに呪具を3つもらう[sey: p. 227].
- 的外れの非難を三回聞いて世間の愚かさを知る[kom: 38].
- 3枚の銀貨で3つの教訓を得る[kom: 65\_2].
- 3人兄弟がそれぞれ呪具を買う[kom: 135].
- 3人の子供が「この世の無常の喜び[最も美味なもの]」をそれぞれ挙げる[kom: 61][zan: 77].

<sup>1</sup> グランド・コモロ島の他、レユニオンやマダガスカルに移住したコモロ人から採話したものを含む[小田 2011b][小田 2014b].

<sup>2</sup> セーシェルでは現在、市井の語り手を見つけることが困難なため、セーシェル国立文書館所蔵の未刊行タイプ原稿[Accouche c.1960]を、管轄するセーシェル観光・文化省の許諾を得て複写・訳出した。

<sup>3</sup> この物語は『千一夜物語』(カルカット第2版)第5夜「シンディバード王の話」(王に寵愛される鷹が王の危機を三回救うものの、誤解によって殺されてしまう)の類話であるが、物語要素群の配置という点ではより巧みである。

## 2.3 反復過程における様態変化

### (1) 等価的

- 3日間秘薬を作る[kom: 6\_1].
- 蚊が耳のところで3日間隠れる[kom: 22].
- スルタンが3つの権利[kom: 65\_1].

### (2) 三回目が肯定的結果

- ココヤシを探りにいった3人のうち、最初の2人は落ちて死ぬ[kom: 31].
- 処女の結婚相手を探し、3人目が処女[kom: 32].
- 牛、犬、雄鳥が太陽を起し、3度目に起きる[kom: 147].
- スルタンが貧しい男に金を三回与えるが毎回失い、最後にすべて戻る[zan: 78].
- 呪具を三回取られるが、三回目にすべて取り戻す[sey: p. 233].

### (3) 三回目が否定的結果

- 魚に3つの願いを叶えてもらうが、3つ目の願いですべてが水泡に帰す[zan: 177].

## 2.4 三回化の重畳的発現

- リンゴの3本の枝にそれぞれ実った3個のリンゴを守るために、3シリングで装備を買って準備し、やって来た巨人に銃を3発撃つ。巨人の居所を3人の老婆に聞き、巨人と3つの道具で試合をし、その3人娘のひとりと結婚する[sey: pp. 197-209].

## 3. 三回化による物語の多層構造化

前節で挙げた例は、いずれもインド洋西域の島嶼群で採取した民話に含まれるものであるが、既に述べた通り、当該地域の民話に大きな影響を与え、従ってモチーフを含む多くの物語要素を共有しているのが『千一夜物語』である。『千一夜物語』では、三回化が様々なレベルでしばしば極限まで用いられ、またそれらが諸々の要素の反復全般と関わっている[Naddaff 1991][小田 2012]。本節では、前節で挙げたような、比較的短い物語における断片的な三回化の要素が、その影響元であり、より大掛かりな『千一夜物語』においてどのように多層化された構造を有しているかについて述べる。

例えば「荷担ぎやと三人の娘の物語」(第10夜～19夜)の登場人物は、端役の「荷担ぎや」以外に、3人の姉妹<sup>4</sup>、3人の遊行僧、またハールン・アル・ラシードとその家臣2人という、3人ずつの3組が登場することに加え、様々な行為の三回化が頻出している。更にまた、このような筋の流れにおける、言わばニアな三回化に加えて、他レベルの構造にも三回化に類した現象が観察される。そのひとつが、語りの中に別の語りが含まれるという「枠物語形式」における、それぞれの物語世界の深度<sup>5</sup>  $dd$  (Depth of the Diegesis)[小田 2012]に関わるものである。そしてもうひとつが、「夜の数」、即ち、シャハラザードが支話(物語内物語)を語り始めてから夜明け前に物語深度が0にクリアされるまでを「1夜」とする物語単位の「長さ」に関わっている。

<sup>4</sup> この3姉妹は異父姉妹であり、長姉には本来の姉が2人いて別の支話の中に登場する。

<sup>5</sup> シャハラザードの「語り」が行われている世界の深度  $dd$  を0とし、以降の語りにおいて物語世界間の移動を示す幾つかの指標が出現した時に  $dd$  が変化する。従って、すべての支話の物語深度は  $dd < 0$  となる。

この、垂直軸上の物語深度と水平軸上の夜の区切りを可視化したのが図1であり、次のような点が三回化と関わっている。

- 垂直軸:物語深度の揺動の振幅が3(物語深度-3と0の差の絶対値)である。
- 水平軸:3人の遊行僧のうち「第二の遊行僧の話」が3夜に亘って語られる。

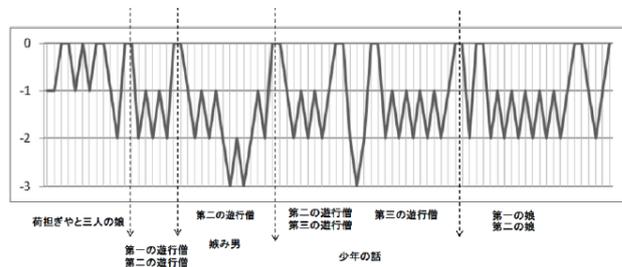


図1: 第10夜から第19夜までの物語深度の揺動<sup>6</sup>

図1に見られるような、垂直軸における物語深度<sup>7</sup>の揺動振幅が3となる他の支話群を、他レベルの三回化と併せて分析することによって、『千一夜物語』内の他所においても多層構造を拾い上げることが出来よう。また、水平軸における「夜」の三分法と並行して、3人の遊行僧の話が図2のようにシフトしながら継起しており、これは別次元(物語内容レベル)の位相差とも呼び得る現象を示している。

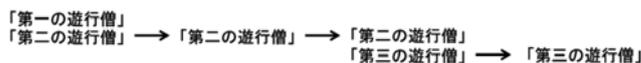


図2: 第12夜～第17夜までの支話群( $dd=-1$ )のシフト配置

このように、『千一夜物語』の第10～19夜には、属詞的性質や行為の三回化、物語深度の揺動振幅の値(3)、夜の区切りにおける単位(3夜)という3つの次元における三回化、及びそれに類する三分法を観察することが可能であり、更により詳細な分析を行うことによって、三回化に類似する他の現象が観察される可能性もあろう。

## 4. 三回化による自己相似構造

三回化によって多層化された構造は、しばしば自己相似に似たものとなる。もとより、『千一夜物語』はシャハラザードが「生き延びるために語る」物語の中に、様々な登場人物が「生き延びるために語る」<sup>8</sup>という、物語内容そのものの次元における自己相似的構造を持っており、それを次のような[畑 1985]による、「一つの集合  $X$  が  $m$  個の自分の miniatures から成り立っている」ことを表す集合方程式で記述することが出来る。

$$X = f_1(X) \cup f_2(X) \cup \dots \cup f_m(X)$$

ここで  $f_1 \dots f_m$  は縮小写像を表しており、それらは『千一夜物語』においては、登場人物が「生き延びるために語る」支話を表

<sup>6</sup> 垂直に引かれた破線は物語単位の交替位置を示しており、揺動に鏡像対称性が見られる。

<sup>7</sup> 『千一夜物語』における物語深度の最深度は -4 を確認している。

<sup>8</sup> 3人の老人が商人の「命を救うために語る」(第1夜～2夜)、3人の遊行僧が自らの「命を救うために語る」(第11夜～16夜)など。

すことになる。そして、この物語内容の自己相似に、前節で述べたような形式上の多層構造が加わることによって、更に精緻な自己相似構造が認められる。

例えば、前節で述べたような「3 人組の 2 番目の人物の話が 3 夜に亘る」ことは、語り手が望むならば、図 3 のようにその 2 番目の登場人物の物語の中に、新たに「3 人」を登場させ、同様にその 2 番目の語り手の「夜」を 3 夜に分割すること、更にまた、すべての登場人物の語りの中にも 3 人を登場させ、以下同様に繰り返していくことが可能であることを示している。そして、このような入れ子構造は、3 等分された線分の中央部分を一边とする正 3 角形を無限に作り出すコッホ曲線の作図法に明らかに類似している。



図 3: 3 人の語り手の 2 番目による語りの入れ子構造

また、図 1 の破線で区切られた揺動に見られる鏡像対称性を発現させているのは、物語深度 0 への回帰性であるが、このような、反復性、無限性、回帰性を包含する自己相似性は、直ちにイスラーム世界観<sup>9</sup>を表象すると言われるアラベスクを想起させる。自己相似性とアラベスクとの関係は自明であり、事実、アラベスクはハールン・アル・ラシードによって 9 世紀初めに創設されたバグダードの「知恵の館」に集った数学者たちによる三角法の発展から生まれたものであり、一方、自己相似形の葉脈曲線やバーンスレイのシダは三角形を基に作図される。

## 5. おわりに

三回化の効果は畢竟、語られるテキストの長さを増大させることであり、例えば、登場人物の「数」を 3 とすることによって筋の展開における潜在的な分岐数が増す。つまり、登場人物の「行為」の種別、また登場人物間の二項間関係[小田 2011a]の種別が増加し、従ってそれらの述部の属性集合も大きくなる。但し、行為レベルの三回化が単純な反復に留まるならば、述部の属性群(の総体)は類似的となり、登場人物はコストの高い「類似的」な人物となる。[Ducrot & Todorov 1972]が登場人物についての、述部の属性間に見られる「類似」と「差異」の均衡を問題とする時、それは結局のところ、述部の属性集合からの選択という問題と同一であり、その均衡を形式的に調整し得るであろうひとつの視座が修辞学である。

三回化は修辞学の観点からは、古典的な修辞技法である反復法が冗語法や列挙法を同時に包含した、多重の修辞効果をもたらすものであると見做すことが出来る。従って、三回化の「3」という数、及びその倍数の反復が持つ修辞的效果についての分析は有用なものとなるであろう。[Durand 1970] は、数に関わる修辞技法として、反復法、列挙法、列叙法、二重の意味付与、対照法、冗語法の 6 種を挙げているが、取り分け、三回化が多

く観察される大規模なテキスト、例えば、『千一夜物語』の起源とされている、枠物語形式を有するインド説話について、それらの技法が用いられている箇所の分析は興味深いものとなろう。

## 付記

本論考は JSPS 科研費 23251010(基盤研究(A)[海外学術調査])「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」(研究代表者:小田淳一)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- [Accouche c.1960] Accouche, Samuel: *Creole stories from various contributors*, Vol. I. [セーシェル国立文書館所蔵タイプ稿, 参照番号:F/2.193].
- [Durand 1970] Durand, Jacques: *Rhétorique du nombre, Communications*, Numéro 16, pp. 125-132, 1970.
- [畑 1985] 畑政義: 自己相似性について, 『物性研究』44(2), pp. 371-372, 1985.
- [Naddaff 1991] Naddaff, Sandra: *Arabesque: Narrative Structure and the Aesthetics of Repetition in the 1001 Nights*, Northwestern University Press, 1991.
- [小田 2010] 小田淳一: アンダルシア音楽を計量する, 水野信男他編『アラブ世界の音文化—グローバル・コミュニケーションへのいざない』, pp. 230-244, スタイルノート, 2010.
- [小田 2011a] 小田淳一: 物語内世界の人物間における二項関係性のネットワーク構造, 2011 年度人工知能学会全国大会(第 25 回)論文集 (CD-ROM: /program/pdf/12.pdf), 2011.
- [小田 2011b] 小田淳一: コモロ人ディアスポラの民話に見る表象群, 高知尾仁編『人と表象』所収, 悠書館, pp. 151-186, 2011.
- [小田 2012] 小田淳一: 物語構造における「反復」の装飾性, 2012 年度人工知能学会全国大会(第 26 回)論文集 (CD-ROM: /program/pdf/252.pdf), 2012.
- [小田 2013] 小田淳一: インド洋民話の DB 化, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・情報資源利用研究センタープロジェクト(2009~2013 年度課題)の報告ページ, [http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes\\_ocean\\_indien.html](http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html), 2013.
- [小田 2014a] 小田淳一: 『セーシエルの民話 I』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2014.
- [Oda 2014b] Oda, Jun'ichi: *Combinaisons micro-macroscopiques des motifs du récit dans les contes comoriens*, Y-S. Live & J. Oda (éd.): *Culture(s), création et identités : un regard anthropologique pluriel*, Institut de recherches sur les Langues et les Cultures d'Asie et d'Afrique, Université nationale des Etudes Etrangères de Tokyo, pp. 11-26, 2014.
- [Propp 1970 (1969)] Propp, Vladimir: *Morphologie du conte*, coll. Poétique, Éditions du Seuil, 1970. [1928 年初版の第 2 版 *Morfologija skazki* (Leningrad, Nauka, 1969) の仏語訳]
- [Todorov & Ducrot 1972] Todorov, Tzvetan & Oswald Ducrot: *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Éditions du Seuil, 1972.

<sup>9</sup> アラブ世界の音楽テキストの分析[小田 2010]においても、反復される旋律線の間に「反行」関係が認められるものがあり、両者を併置すると鏡像対称性になる。